三代集における主節中の主格の「の」について

小田　勝

The nominative particle *no* in the main clause in the *Sandaishu*

ODA, Masaru

Abstract

This paper discusses which inflectional ending appears when the nominative particle *no* occurs in the main clause. The data was taken from the *Sandaishu* (a collection of poetry from the *Heian* period). The conclusions drawn from this study are as follows:

1. When the nominative particle *no* occurs in the main clause, the adnominal form ending most frequently appears.
2. However, the *izenkei* form ending, the [*mizenkei* + *namu*] ending, and the dictionary form ending can also occur.

Key words

主格　格助詞「の」　連体形止め　係り結び

○　本稿の目的

中古において主格の「の」助詞が現れるのは、従属節中であるか、主節の場合には述語が連体形の場合に限られるというのが通常の理解である。[1] 野村剛史（一九九三ａ）・野村剛史（一九九六）は、上代の主格の「の」「が」助詞が現れる文法的位置を次のように整理していて（後者によって示す）、

①連体句の中、②準体句の中、③連体止めの句の中、④係り結びの連体形結び句の中、⑤順接条件句の中、⑥ク語法句の中、⑦ある種の終助詞句の中、⑧引用型「と」副詞句の中、⑨連用句の中

これを要するに、主格の「の」「が」助詞が現れ得るのは、従属節中（①②⑤⑥⑧⑨）であるか、主節の場合には述語が連体形の場合（③④⑦）に限られるということができる。ところで、中古和歌には、述語が連体形でない主節中に主格の「の」助詞が現れた例が存在する。[2]

1　垣越しに散り来る花を見るよりは根込めに（＝根コソギ）風の吹きも越さなん（後・八五）[3]

2　秋の露色々ことに置けばこそ山の木の葉の千種（ちぐさ）なるらめ（古・二五九）

右のような例をどう考えたらよいだろうか。中古語において主節中の主格の「の」助詞が現れる環境はどのように記述されるだろうか。本稿は、三代集の和歌を資料として、中古語において、主節中の主格の「の」助詞がどのような環境に現れるか調査、考察するものである。[4]

一　述語が連体形の句型

「…の…連体形」の句型[5]には、①所謂「連体止め」として「…コトヨ！」の意の感動表現を作るもの、②「…の…らむ（けむ）」の句型のもの、がある。述語が連体形でそれに付属語が付いているものは第二節に、述語が係助詞に対する連体形の結びになっているものは第三節にあげる。

一・一　連体止め（擬喩述法）

まず、「…の…連体形」で感動表現を作る例が存する。この連体形は体言相当で、

3　真金（まがね）ふく吉備の中山帯にせる細谷河の音のさやけさ（古・一〇八二）

4　東路（あづまぢ）の佐野の舟橋かけてのみ思ひ渡るを知る人のなさ（後・六一九）

のような喩体的表現を作る[6]。中古の主節中の主格の「の」助詞の用法といえばこの用法がすぐに想起されるが、三代集における主節中の主格の「の」全二一三例のうち、この用法は三九例（18％）にすぎない。述語の品詞別にあげると、次の通りである。

①動詞

5　春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯の鳴く（古・六）類例、古・一七二、二二〇、四二三、七七三、八四三、一〇一一、後・三三〇、拾・一〇一。

なお、次例6は上に係助詞「や」が現れているが、この「ありとや」は「ありとや［思フラム］」の意であって、述語の「鳴く」は「や」の結びではなく「…の…連体形」の擬喩述法である[7]。

6　折りつれば袖こそにほへ梅の花ありとやここに鶯の鳴く（古・三二）類例、拾・九七六

②形容詞

7　今日別れ明日は近江と思へども夜やふけぬらむ袖のつゆけき（古・三六九）類例、古・五〇六、五二四、五三八、五六〇、五八四、後・二九、九一、二四四、四二一、一一七八、一三四〇、拾・九五一、九五七、一一〇二。

③形容動詞

8　咲きそめし時より後はうちはへて世は春なれや色の常なる（古・九三一）

④助動詞

9　去年（こぞ）の夏鳴きふるしてし郭公それかあらぬか声の変はらぬ（古・一五九）類例、古・三二七、五七四、九三〇、九八四、一〇四一、後・三四、三八、一四九、三二七、七一七、拾一八一。

10　散ると見てあるべきものを梅の花うたて匂ひの袖にとまれる（古・四七）類例、拾・三八九。

一・二　「…の…らむ（けむ）」

「…の…らむ（けむ）」の句型は、五種に分けられる。

①「どうして」の意を添えて解釈される例

11　ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（古・八四）類例、古・九三、一二〇、四二二、五八六、六七六、七二七、七四一、七六四、七八七、後・二三八、三一〇、三一六、拾・二〇六、八五五。

②「どうして」の意の疑問詞が存在する例

12
a　露わけし袂ほす間もなきものをなど秋風のまだき吹くらん（後・二二二）
b　あはれとも憂しとも物を思ふ時などか涙のいとながるらん（古・八〇五）類例、後・一〇三七、拾・二〇九、四九七。
c　篝火にあらぬ我が身のなぞもかく涙の河に浮きて燃ゆらむ（古・五二九）
d　裁ち縫はぬ衣着し人もなきものをなに山姫の布さらすらむ（古・九二六）
e　たぎつ瀬のはやき心を何しかも人目つつみの塞きとどむらむ（古・六六〇）
f　岩間をも分けくる滝の水をいかで散りつむ花のせきとどむらん（拾・六七）類例、拾・三二四。
g　冬の池の上は氷に閉ぢられていかでか月の底に煎るらん（拾・二四一）類例、拾・三七八、五三三、一二三四。
h　白露は上より置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづらん（拾・五一三）

③原因・理由を表す条件句部分を推量する例

13
a　心ざし深く染めてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらん（古・七）類例、古・二一六。
b　春立つと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆらん（後・二）
c　誰聞けと声高砂にさを鹿の長々し夜をひとり鳴くらん（後・三七三）

④「どうして」の意以外の疑問詞が存在する例

14
a　真薦刈る堀江に浮きて寝る鴨の今夜の霜にいかにわぶらん（後・四八三）
b　冬の池の水に流るる葦鴨のうき寝ながらに幾夜へぬらん（後・四九〇）[8]
c　篝火にあらぬ思ひのいかなれば涙の河にうきて燃ゆらん（後・八六九）
d　君はよし行末遠し留まる身のまつほどいかがあらんとすらん（拾・三三四）
e　年をへてたちならしつる葦鶴のいかなる方に跡とどむらん（拾・四九八）

15
a　吉野山峰の白雪いつ消えて今朝は霞の立ちかはるらん（拾・四）
b　逢ひ見でもありにしものをいつのまにならひて人の恋しかるらん（拾・七一二）
c　さざなみや志賀の浦風いかばかり心の内の涼しかるらん（拾・一三三六）
d　雲ゐ路のはるけきほどの空事はいかなる風の吹きて告げけん（後・一一四一）
e　とりもあへず立ち騒がれしあだ浪にあやなく何に袖の濡れけん（後・一一五九）

14は疑問詞が「の」の内側にある例（「…の…疑問詞…らむ」の句型）、15は疑問詞が「の」の外側にある例（「…疑問詞…の…らむ（けむ）」の句型）である。

⑤単に直上の句を推量する例

16　行く人をとどめがたみの唐衣たつより（＝出発スルトスグニ）袖の露けかるらん（拾・三二一）

「…の…らむ」の句型については、次のような問題が存することから、

様々な議論がある。

i　推量の助動詞「らむ」がどうして喚体的表現である連体止めの位置に現れるのか。

ii　①の句型は、なぜ「どうして」の意を添えて解釈されるのか。

iについては、この「らむ」は「だろうことよ！」という喚体的表現ではあり得ないとする立場（近藤泰弘・二〇〇〇、野村剛史・一九九七など）と、この「らむ」は喚体的表現と考えてよいとする立場（山口堯二・一九八八、小出祥子・二〇一〇など）とがある。iについて、山口堯二（一九八八）は、「らむ」が喚体的表現の環境にたつことによって疑念を含意すると説明している。[9] 推量の助動詞だから喚体的表現ではありえない、とは言えないだろうし、[10] 小出祥子（二〇一〇）が指摘するように上代では「らむか」という感動表現が存在したのであって（「あみの浦に船乗りすらむ娘子らが玉裳の裾に潮満つらむか」［良武香］」万葉集・四〇など）、「らむ」は本来喚体的表現を構成し得る語であったと考える方が言語事実にあうと思う。[11]

二　述語が「連体形＋付属語」の句型

述語に連体形接続の付属語が下接した例がある。いずれも、

［――の　……　連体形］＋　かな
［――の　……　連体形］＋　なり

のように、「の」は連体形という準体言相当部分に係ると考えられる。

二・一　連体形に終助詞が付属する例

この句型は「…の…連体形」の下に終助詞[12]「かな」「か」「よ」「ぞ」が付属した例がみえる。

①「…の…連体形＋かな」

17　待つ人にあらぬものから初雁の今朝鳴く声のめづらしきかな（古・二〇六）類例、古・三四二、四一五、六八六、八四五、八五二、後・八一、一四二、一五四、五八七、六五九、一〇二九、一二三四、拾・六〇、一三六、一三一、二四四、二八八、三二六、四四五、五二八、五五三、六二六、六三七、八七〇、九五六、九五八、一〇一八、一二三五。

次例は、この句型の倒置形。

18　しるしなき音をも鳴くかな鶯の今年のみ散る花ならなくに（古・一一〇）

②「…の…も…連体形＋か」

19　河風の涼しくもあるかうち寄する浪とともにや秋はたつらむ（古・一七〇）類例、古・七七四、九二三。

次例は、この句型の倒置形。

20　吹きまよふ野風を寒み秋萩の（＝秋萩ノヨウニ）うつりもゆくか人の心の（古・七八一）

③「…も…の…連体形＋か」

21　天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから（古・七八四）類例、古・八八四、後・二一七。

④「…の…連体形＋よ」

22　春の野に生ふる無き名のわびしきは身をつみてだに人の知らぬよ（拾・六八八）

⑤「…の…連体形＋ぞ（断定）」

23　心ありて問ふにはあらず世の中にありやなしやの聞かまほしきぞ

（拾・一一九三）

二・二　連体形に断定の助動詞「なり」が付属する例

24 a　先立たぬ悔ひの八千度（やちたび）かなしきは流るる水の帰り来ぬなり（古・八三七）

b　命にもまさりて惜しくあるものは見果てぬ夢の覚（さ）むるなりけり（古・六〇九）類例、古・一〇一〇、後・三一一、四七一、四八四、五〇三、五九八、九一〇、拾・二四〇、五四二。

c　春霞たちて雲居になりゆくはかりの心の変はるなるべし（後・七五）類例、後・四六三、五四六。

三　係り結び文（述語が連体形）の句型

係り結び文中に主格の「の」が現れた例が存する。「こそ…已然形」の文中にも主格の「の」が現れるが、それは第四節にあげる。

三・一　係助詞が主格の「の」の内側にある例

①…の…ぞ…連体形

25　植ゑて去（い）にし秋田刈るまで見え来ねば今朝初雁の音にぞ鳴きぬる（古・七七六）類例、古・一〇三三。

②…の…や…連体形

26　うちしのびいざ住の江の忘れ草忘れて人のまたや摘まぬと（拾・四六六[13]）

27　秋深み恋する人の明かしかね夜を長月といふにやあるらん（拾・五二三）

③…の…か…連体形

28　あしひきの山辺にをれば白雲のいかにせよとか晴るる時なき（古・四六一［拾・三八〇］）類例、後・一二七二。

このような句型の存在は、野村剛史（二〇〇五）のいう係り結びの形骸化によるものである。すなわち、野村剛史（二〇〇五）によれば、上代では、

［係り句］［　～の・が～（連体形句）］

の句型しかなかったものが、中古になって係助詞が自由な位置に挿入されるようになって、右のような句型が存在するのである。

三・二　係助詞が主格の「の」の外側にある例

①…ぞ…の…連体形

29　青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける（古・二六）

30　ことならば思はずとやは言ひはてぬなぞ世の中の玉襷（たまだすき）なる（古・一〇三七）類例、拾・七九六。

②…や…の…連体形

31　流れ行く水こほりぬる冬さへやなほうき草の跡をとどめぬ（後・四八六）類例、後・四二六、拾・八九。

32　夕されば蛍より異（け）に燃ゆれども光見ねばや人のつれなき（古・五六二）類例、後・五二八

33　みるめなき我が身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る（古・六二三）

34　時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを（古・八三九）類例、拾・七八四。

35　絶えず行く飛鳥の河のよどみなば心あるとや人の思はむ（古・七二〇）

36　春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ（古・二二）類例、古・五五二、七六二、九四九、一〇四六、一〇六六、拾・四六七、一一五一、一二七九。

なお、この句型で32・33のような「…ばや…の…連体形」で「や」が文末に係る句型の解釈は、多くの注に誤り散見されるように思う。「ばや」の「や」が文末に係る（「や…連体形」の係り結びになっている）場合、「ばや…連体形」の文全体が疑問文になるのであって、この場合の「の…連体形」は感動を表す連体止めではない。[14] 例えば32は、

恋の炎は目に見えないせいか、あの人はあのように冷淡なことよ。

（新編日本古典文学全集訳。新潮日本古典集成、片桐洋一『古今和歌集全評釈』なども同様）

のような解釈が行われているが、このような解釈は成立しないだろう。それは、

37　思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを（古・五五二）

の傍線部を、「思ひつつ寝ればや。人の見えつらむ！」（「思い続けて寝るせいか、あの人が夢に見えただろうことよ！」）のように解することはできないのと同様である（37の傍線部は「思い続けて寝るので、あの人が夢に見えたのだろうか。」の意）。32は、「光見ねばや人のつれなき」全体で疑問文になるから、例えば、角川文庫『新版　古今和歌集』（高田祐彦）の、

その思いの光をあの人は見ないので、つれないのであろうか。

が適切な解といえるべきである（なお「見ねば」が他動詞であるという点でも右の解釈は正確である）。しかしその角川文庫新版も、33は、

そんな私は、海松布の生えていない浦と同じですが、その私に逢えないことを知らないので、あの人は絶えることなく足がだるくなるほど通ってくるのですね。

のような解釈になっている。これは同様の理由で「…逢わないでいるのだとも知らないので、あの人は遠のきもしないで足もだるくなるままで通っていらっしゃるのですか。」（新日本古典文学大系）の解釈が（句型把握としては）適当である。

③…か…の…連体形

38　思ふよりいかにせよとか秋風になびく浅茅の色ことになる（古・七二五）類例、後・七四八、拾・七一六。

39　うき世には門鎖せりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする（古・九六四［拾・四八一］）類例、後・五五、五七七。

40　雨降りて庭にたまれる濁り水誰がすまばかは影の見ゆべき（拾・一二五三）

41　いづこにか今夜の月の見えざらんあかぬは人の心なりけり（拾・一七六）類例、古・九五二、一〇五三、後・一四四。

42　雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらむ（古・八六）類例、古・八〇三、拾・三七九。

43　いかなりし節にか糸の乱れけんしひてくれども解けず見ゆるは（後・一一六二）

三・三　係りの副詞が「の」の外側にある例

「など」は副詞であるが文末は必ず連体形で結ぶ（小田勝・二〇一〇）。「係りの副詞」（三浦和雄・一九七四）として、ここにあげる。[15]

44　たぎつ瀬の中にも淀はありてふをなど我が恋の淵瀬ともなき（古・四九三）

四　述語が已然形の句型

述語が已然形の句型には、①「こそ…已然形」の係り結び文中に現れたもの、②述語が反語の「めや」のもの、がある。主節中に主格の「の」が表されているからといって、述語が連体形であるとは限らないのである。

四・一　係り結び文（述語が已然形）

①係助詞が主格の「の」の内側にある例（「…の…こそ…已然形」）

45　しのぶれど恋しき時はあしひきの山より月の出でてこそ来れ（古・六三三）類例、古・二一三、八〇四、後・八五一、九三〇［後・一四三三］。

②係助詞が主格の「の」の外側にある例（「…こそ…の…已然形」）

46　秋の露色々ことに置けばこそ山の木の葉の千種なるらめ（古・二五九）類例、古・二九八、拾・六八五。

四・二　述語が反語を表す「めや」

47　笹の葉に置く初霜の夜を寒みしみは付くとも色に出でめや（古・六六三）類例、後・一三七。

五　述語が連体形・已然形でない場合

五・一　「…の＋あな＋語幹」

次例の「ながながし」はシク活用形容詞の語幹であって、これは感動表現の句型に主格の「の」が現れたものである。

47　加古の島松原ごしに鳴く鶴のあなながながし聞く人なしに（拾・四五九）

五・二　引用句中の例

引用句中の主節の主格が「の」「が」で表示され、その引用句中の文末が終止形という、「『…の（が）…終止形』と…」という句型が存在する。野村剛史（一九九三a）・野村剛史（一九九六）は、「汝が来と思へば」（万葉集・五二八）、「老の病のいつともなきが苦しと思ひたまふべし。」（源氏・手習）などの例をあげている（このような句型は『源氏物語』に二〇例ほどあるという）。三代集中にこの句型の確例は48の一例である。

48　みよしのの吉野の滝に浮かび出づる泡をか玉の消ゆと見つらむ（古・四三一）

次例49は述語が終止形・連体形同形であるが、擬喩述法としての意がないので、48と同様波線部は終止形と考えるべきであろうか。[16]

49 a　鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老隠るやと（古・三六八）

b　桜花散りかひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに（古・三四九）

c　伊勢の海人の朝な夕なに潜くてふみるめに人を飽くよしもがな（古・六八三）

d　蝉の声聞けばかなしな夏衣薄くや人のならむと思へば（古・七一五）

e　淀河の淀むと人は見るらめど流れて深き心あるものを（古・七二一）

f　思ひ出でて恋しき時は初雁の鳴きて渡ると人知るらめや（古・七三五）

g　思へどもなほうとまれぬ春霞かからぬ山のあらじと思へば（古・一〇三二）類例、古・八一六、八九五、一〇五四、一〇八一、拾・四〇九、五一五。

ただし引用句末が連体形の例も二例存する。[17]

50 a　白玉の秋の木の葉にやどれると見ゆるは露のはかるなりけり（後・三一一）

b　駒にこそまかせたりけれあやなくも心の来ると思ひけるかな（後・九七九）[18]

48のような句型の存在は、一方で50の句型が存することと併せて、どう考えたらよいかわからない。

五・三　述語が「未然形＋なむ（誂えの終助詞）」の例

述語が「未然形＋なむ（誂えの終助詞）」の例が存する。

51　垣越しに散り来る花を見るよりは根込めに（＝根コソギ）風の吹きも越さなん（後・八五）[19]

なお、三代集中にはみえないが、命令（述語が命令形）の文に主格の「の」が現れた例も存する。

52　消えもあへずはかなきころのつゆばかりありやなしやと人の問へかし（後拾遺・一〇一二）

五・四　文末が終止形の存疑例

「…の…終止形」の存疑例は、53～57の五例である。[20]

53　池にすむ名ををし鳥の水を浅み隠（かく）るとすれど現（あらは）れにけり（古・六七二）

54　玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬ心のうれしげもなし（古・七〇九）

55　世の中にいづら我が身のありてなしあはれとや言はむあな憂とや言はむ（古・九四三）

56　人目をもつつまぬものと思ひせば袖の涙のかからましやは（拾・七六四）

57　鷹飼のまだも来なくにつなぎ犬の離れて行かむ汝（な）来る待つほど（拾・四一九）〈物名「空車（むなぐるま）」〉

53の「の」は「～のように」の意であるが、「をし鳥ノヨウニ」は、「隠るとすれど」までではなく「隠るとすれど現れにけり」まで係るので、歌意は「鴛鴦が、水が浅いので、隠れようとするが現れてしまう（ように、二人の関係は露見してしまう）」ということであって、形態上「をし鳥の」は「現れにけり」の主格であるといってよかろう。54も総主文的な構文ではあるが、「…の…終止形」の例とみてよかろう。「の」を連体格ととって「絶えぬ心のうれしげ」というまとまりを考えるのは無理だろう。類例に次のような例がある。

58　秋の田のいねてふ事をかけしかば思ひ出づるがうれしげもなし（後・五一三）

55について、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』は、「我が身の」は「ありて」までしか係らないとするが、稿者の感覚では無理な気がする。56は反語の句型であるが、「やは」は終止形接続なので、「まし」は終止形と

考えられる。57の「む」は終止形・連体形同形であるが擬喩述法としての意がないので、終止形と考えるべきだろうか。三代集中には以上のような「…の…終止形」とみるべき用例が存在する。このようなところに、中世の「…の…終止形」[21]の萌芽をみることになるだろうか[22]。

六　結論

以上、三代集から、主節中に主格の「の」が現れる環境を整理して示すと、次のようになる。

Ⅰ　述語が連体形

A　連体止め（擬喩述法）　三九例
B　…の…らむ　四五例
C　連体形＋終助詞　三九例
D　連体形＋なり（断定）　一四例
E　「ぞ」の係り結び文中　五例
F　「や」の係り結び文中　二〇例
G　「か」の係り結び文中　一七例
H　など…の…連体形　一例
I　引用句中　二例

Ⅱ　述語が已然形

J　「こそ」の係り結び文中　八例
K　…の…已然形＋めや（反語）　二例

Ⅲ　述語が連体形・已然形以外

L　…の＋あな＋語幹　一例
M　…の…未然形＋なむ（誂え）　一例
N　引用句中（述語が終止形）　一例
N’　引用句中（述語が終止形・連体形不明）　一三例
O　終止形（存疑例）　五例

以上を要するに、三代集歌において、主節中の主格の「の」は、述語が連体形の文のほかに、述語が已然形の文（「こそ…已然形」の係り結び文、「已然形＋めや」の文）、未然形の文（「未然形＋なむ（誂え）」の文）にも出現し（後拾遺和歌集では命令形の文にも出現している）、また、若干ではあるが述語が終止形の文にも出現している、ということがいえるのである。したがって、平安時代の三代集歌を資料とした場合、本居宣長が『詞玉緒』で示した「ぞのや何―㊥（＝連体形）」という呼応は事実の正確な記述とはいえないと評される。述語が終止形の文は、次代の萌芽的な例であろうから、これを例外とすることができようが、中古語を範とする標準的な文語文法において、例えば、

主格の「の」が用いられているときには、その文節を受ける述語は、他の文節を修飾し下に続くか、連体形で結ぶ。

のような記述（注1参照）は、少なくとも次のように改められる必要がある、ということになるのである。

主格の「の」が用いられているときには、その文節を受ける述語は、他の文節を修飾し下に続くか、終止形以外の形で結ぶ。

注

（1）「主格の「が」「の」が用いられているときには、その文節の受ける述語は、終止形にならず、他の文節を修飾し、下に続くか、連体形で結ぶ。」（久保田淳・白藤禮幸『新しい古典文法』二〇〇三年・明治書院刊、七八頁）、「主語を示す

用法は…（中略）…応じる述語が終止形で言い切りとなる文はなく、必ず従属節内の主格を示すか、述語が連体形で止まるかを原則とする。なお、「確かに人の語り侍りしなり」〈源・藤袴〉など「…の…なり」の形式は、「の」に応じて終止形で言い切るわけではなく、「…の…連体形」というまとまりに断定「なり」が付いたものである。」（『ベネッセ古語辞典』「の」の項「参考」欄）など。

（2）この点で拙著『古代語日本語文法』（二〇〇七年・おうふう刊）、『古典文法詳説』（二〇一〇年・おうふう刊）の記述は不十分であった。

（3）テキストは新日本古典文学大系（岩波書店刊）による。所在は、『古今和歌集』を「古」、『後撰和歌集』を「後」、『拾遺和歌集』を「拾」と略記し、歌番号を付した。「古・四六一［拾・三八〇］」のような表示は、同じ歌が重出していることを示す（重出例は、第六節の用例数には、重複して数えていない）。引用にあたり、表記は私意によって改めた。

（4）本稿で「主節中の主格の「の」」という場合、次のような「の」は除外する。

①「～のように」の意の「の」

・吉野河岩きり通し行く水の音にはたてじ恋ひは死ぬとも（古・四九二）

・人知れず思へば苦し紅の末摘花の色に出でなむ（古・四九六）

・明けたてば蝉のおりはへ鳴きくらし夜は蛍の燃えこそわたれ（古・五四三）

・上にのみおろかに燃ゆる蚊やり火のよにもそこには思ひ焦がれじ（後・九九一）

・ふるさとの三笠の山は遠けれど声は昔のうとからぬかな（後・一一〇六）

②語を導き出す序詞の末尾の「の」

・葦鴨（あしかも）の騒ぐ入江の白浪の知らずや人をかく恋ひむとは（古・五三三）

・雲晴れぬ浅間の山のあさましや人の心を見てこそ止（や）まめ（古・一〇五〇）

③枕詞の末尾の「の」

・つらしとや言ひ果ててまし白露の人のこころに置かじと思ふを（後・八九三）〈「白露の」は「置く」の枕詞〉

一方、用例23のような、現代語で「ガ」と訳される、対象を表す用法の「の」は、主格の「の」に含めた。

（5）述語が準体言と考えられるものは主節中の用例ではないから除外される。次のような例は準体言と考えた。

・来むと言ひしほどや過ぎぬる秋の野に誰松虫ぞ声のかなしき（後・二五九）〈「声のかなしき［八］誰松虫ぞ」の倒置と考えた〉

・我が来つる方も知られずくらぶ山木々の木の葉の散るとまがふに（古・二九五）〈「（くらぶ山ノ暗イノガ、木ノ葉ノ）散る［ノト］まがふノデ」〉

また、次のような例も、一見「…の…連体形」の句型にみえるが、「頼めこしことの」は「絶えて」に係るから、この「の」は主節中のものではないと考えた。

・いにしへの心はなくやなりにけん頼めしことの絶えて年ふる（後・一〇〇三）

（6）このような語法を山田孝雄（一九〇八）は「擬喩述法」と呼び、次のように述べている。

述語を以て体言的に結体すべき勢をとりて、喩体句の如く見えしむるを（引用者注、中止述法ト）異なりとす。かくするには連体形を以てするなり。かゝる述法に立てるものは其の余韻によりて述体ながらも喩体の性質を帯びたるなり。而して上にはかの「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」なき時にあらはれてしかして準体形をとるなり。其の意の多くは、感嘆若くは切に呼びかくるが如き意を寓したるものなり。（二二八頁）

（7）「の」のない次のような句型も同じ。

・春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはり行く（古・六九）

（8）上句は序詞とも解される。

（9）あり得る考え方だと思うが、そうすると「の」がなくて「どうして」の意を含意する、次のような例をどう説明するか問題になろう。この「らん」を連体形とするのだろうか。

・秋の野の草は糸とも見えなくに置く白露を玉と貫くらん（後・三〇七）

（10）例えば、「なんて頭のいい奴だろう！」のような感動表現はあり得よう。なお、このような文については、鄭相哲（一九九四）参照。

（11）高山善行（二〇一一、六四頁）は、「…の…らむ」構文について、

［ノ　……　連体形］＋　ラム

のように、「らむ」が準体句に外接しているという見方を提案しているが、「らむ」は終止形接続であるし、

春の色の至り至らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ（古・九三）

のような用例の存在からも、そのような見方は無理であろう。

（12）終助詞のほかに間投助詞をたてる考えかたもあるが（例えば山田孝雄『平安朝文法史』は、「か・が・な・かし」を終助詞、「や・し・よ・を」を間投助詞

とする）、本稿では、両者を一括して終助詞とした。また、用例23のような「ぞ」も終助詞として扱った。

(13)「さあ、人目につかぬように住の江にこっそりと行き、恋の思いを耐え忍びながら住んで見届けよう。あの人が私のことをすっかり忘れてしまって、忘れ草をまた摘むことがないかどうかを。」（新日本古典文学大系訳）

(14) 注6引用文中の、「（擬喩述法ハ）上にはかの「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」なき時にあらはれてしかして準体形をとるなり」を参照せよ。なお、用例6のように、文中の「や」が文末に係らない例も存する。

(15) 係助詞「か」のない「疑問詞…の…連体形」の句型の例。
・立ちのぼる煙につけて思ふかないつまた我を人のかく見む（後拾遺集・五三九）

(16) 詞書の例として「『親の呼ぶ』と言ひければ」（古・七四五）がある。

(17) 詞書の例として「『世の中の心にかなはぬ』など申しければ」（後・一一一五詞書）がある。

(18)「馬に任せてのことだったのですねえ。あさはかにもあなたの心が来るのだと思ったことでした。」（工藤重矩『後撰和歌集』和泉書院）

(19) 三代集以外の類例をあげる。
・かりがねぞ今日帰るなる小山田の苗代水の引きもとめなん（後拾遺集・七二）

(20) なお、大阪女子大学国文学研究室『後撰和歌集総索引』の「索引二　和歌付属語」で助詞「の」を引くと、「⑥主格（体言＋「ノ」＋終止形）」という項が設けてあって、そこに11例も表示されていて驚くが、示されるのは、順に、
・鶯のなくなる声は昔にてわか身ひとつのあらすもある哉（八一）
・かきこしにちりくる花を見るよりはねこめに風の吹きもこさなん（八五）
・身は、やくならの宮こと成にしをこひしきことのまたもふりぬか（五六一）
以下の11例であって（引用は同書の本文編（本文綜覧）による）、まことに不適当なので注意されたい。

(21) 次のような例。
・年ごろありける侍の、妻に具して田舎へ往にけり。（宇治拾遺物語・五―八）

(22) 尾崎暢殃（一九六九）は『万葉集』における「の…終止形」の例として、次のような例をあげている（③は序詞の末尾の「の」の例）。
①…情なく　雲の　隠さふべしや（一七）
②暮されば小椋の山に臥す鹿の今夜は鳴かず寝ねにけらしも（一六六四）
③草香江の入江に求食る蘆鶴のあなたづたづし友無しにして（五七五）
なお『源氏物語』における「が…終止形」の例として、野村剛史（一九九六）は④を、此島正年（一九五九）は⑤をあげているが、
④大尼君の孫の紀伊守なりけるが、このころ上りて来たり。（手習）
⑤大きなる松に藤の咲きかかりて月かげに靡きたる、風につきてさとにほふが、なつかしくそこはかとなきかをりなり。（蓬生）
④は大島本等に「が」が無く、⑤は「風につきてさとにほふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり」と読んで、「が」の係り先を「なつかしく」までとする読み方もあり得ようかと思うので付言する。此島正年（一九五九）は、ほかに次のような例もあげている。
⑥丈六の仏のいまだ荒作りにおはするが、顔ばかり見やられたり。（更級日記）

参考文献

尾崎暢殃（一九六九）「継ぎて見すらし―「の―連体形」について―」『月刊文法』二―一
小田勝（二〇一〇）「疑問詞の結び」『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』四九
小出祥子（二〇一〇）「ラムと終助詞カの接続関係に関する一考察」『名古屋大学国語国文学』一〇三
此島正年（一九五九）「古代における主格助詞「が」「の」」『弘前大学人文社会』一六
近藤泰弘（二〇〇〇）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
高山善行（二〇一一）「第2章　述部の構造」『シリーズ日本語史3　文法史』岩波書店
鄭相哲（一九九四）「ダロウによる感嘆文」『岡大国文論稿』二二
野村剛史（一九九三a）「上代語のノとガについて（上）」『国語国文』六二―二
――（一九九三b）「上代語のノとガについて（下）」『国語国文』六二―三
――（一九九六）「ガ・終止形へ」『国語国文』六五―五
――（一九九七）「三代集ラムの構文法」『日本語文法　体系と方法』ひつじ書

――――（二〇〇五）「中古係り結びの変容」『国語と国文学』八二―一一房
三浦和雄（一九七四）『文語文法　用例と論考』明治書院
山口堯二（一九八八）「喚体性の文における疑念の含意―「しづ心なく花のちるらん」の基底―」『国語国文』五七―二
山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』宝文館